



# 旧プリピャチ住民にとってチェルノブイリ原発事故とは何だったのか

広島大学平和科学研究センター

川野徳幸

2011年3月18日

Героїм,  
професіоналам,  
тим, хто  
захистив світ  
від ядерної біди.

На відзначення  
20-річчя  
спорудження  
об'єкта "Укриття".

30.11.2009г.

# 原子力の町、プリピャチ



# 目的

- 直接の被害者である旧プリピャチ住民の声を手がかりに、チェルノブイリ原発事故被害の一端を明らかにする。
- 「チェルノブイリ原発事故とは一体何だったのか」「原発事故はわれわれに何を問いかけているのか」といった大テーマを考える手がかりとしたい。
- 原子力の是非を考える際の一つの(重要な)判断材料を提供したい。
- 旧プリピャチ住民は、原子力に対してどう考えているのか。

# 本調査研究の前提

- 原子力エネルギーは、われわれに様々な恩恵を付与してきた。と同時に、甚大な厄災をも与える可能性を秘めてきた。その最たる事例がチェルノブイリ原発事故であろう。原子力はまさに「諸刃の剣」であり、その事実をわれわれは認識しなければならない。
- 原子力を巡る公平な情報の提供→光も陰も開示する
  - その上で、その使用を決断するのも「人類の選択」であり、「人類の知恵」であるのかもしれない。他方、そうだとすれば、それを使用しないという知恵もあってよいだろう。
  - その是非を判断するための「材料」は公平に提供されるべきである。TVコマーシャルの不公平さ(国策故)。

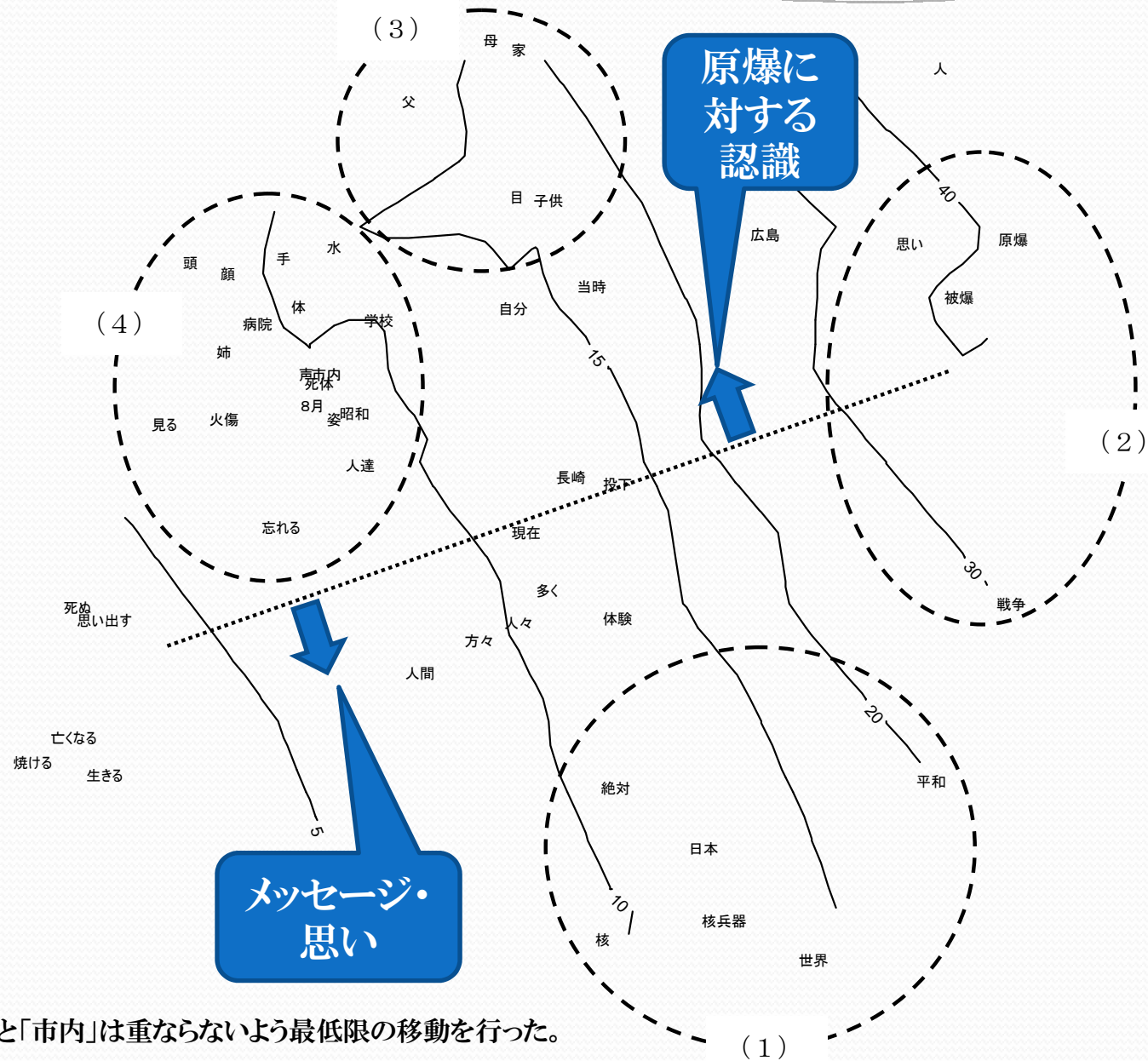
## 本調査研究の出発点（「原爆・被ばく研究」を看板とする研究者としての関心事）

- 原爆被爆者とチェルノブイリ原発事故被災者との異同
- 生き残った原爆被爆者（“コア”な被爆者）たちは、悲惨な原爆体験にもとづく、「反核兵器」というテーゼを確立、「唯一の被爆国・日本」の立場を牽引
- チェルノブイリ原発事故被災者たちにとっての原発とは何か？

# 朝日新聞「被爆60年アンケート調査」自由記述 における出現頻度の高い上位50単語

単語	出現頻度 延べ数	単語	出現頻度 延べ数	単語	出現頻度 延べ数	単語	出現頻度 延べ数	単語	出現頻度 延べ数
被爆	5060	水	1694	日本	1101	病院	939	方々	782
原爆	4584	家	1644	投下	1078	学校	921	昭和	777
人	4397	父	1536	核兵器	1063	現在	911	姉	767
戦争	3248	死ぬ	1504	死体	1056	8月	887	手	755
広島	2927	子供	1503	思い出す	1028	思い	858	顔	745
見る	2570	当時	1407	体験	1017	人達	853	火傷	740
母	2038	生きる	1318	目	1014	市内	850	多く	736
亡くなる	1851	長崎	1278	人々	971	絶対	812	体	718
平和	1808	自分	1276	核	970	焼ける	807	人間	716
忘れる	1794	世界	1188	姿	970	声	783	頭	712

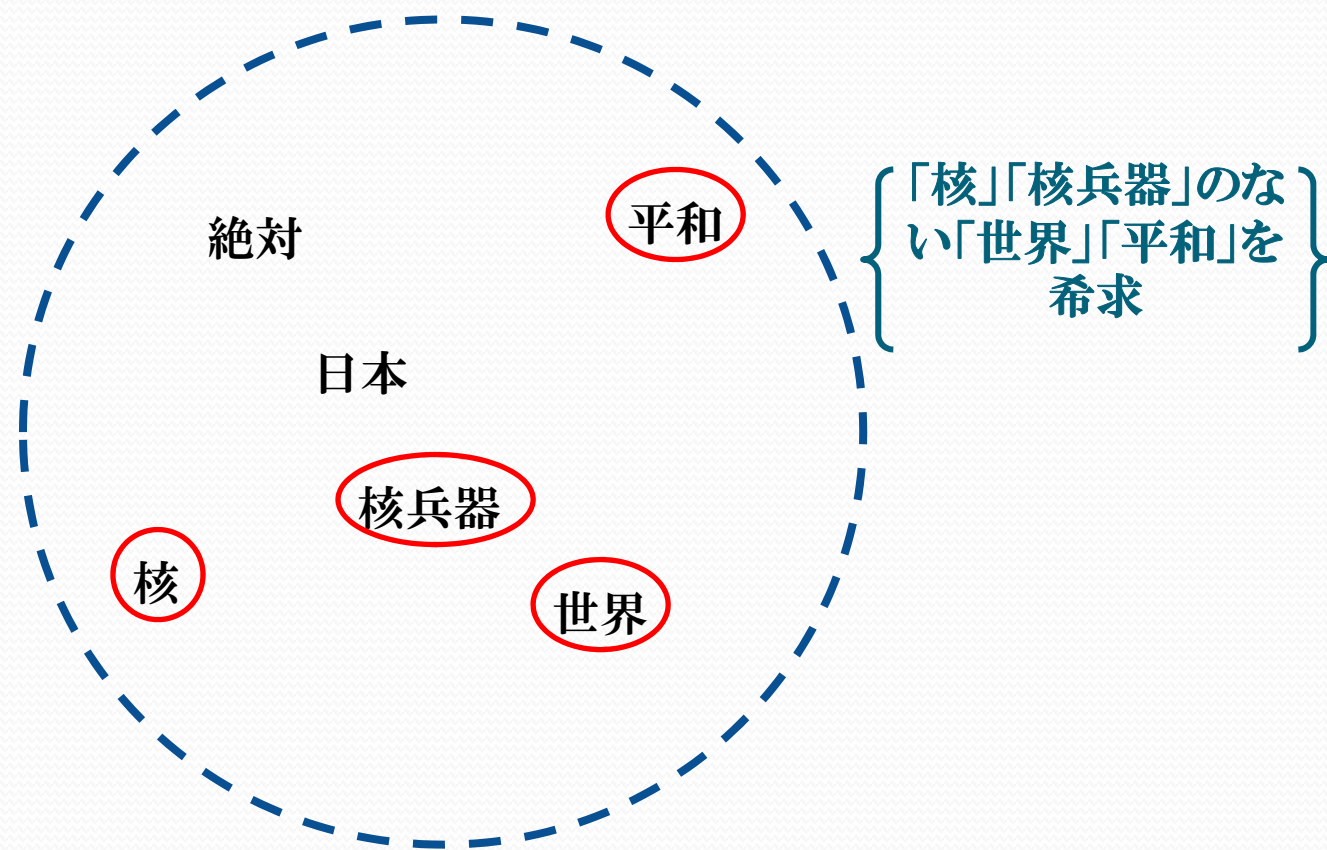
# 多次元尺度法による原爆被爆者の原爆体験に対する認識構造とメッセージ・思い



\*「死体」と「市内」は重ならないよう最低限の移動を行った。

# 原爆被爆者のメッセージ・思い

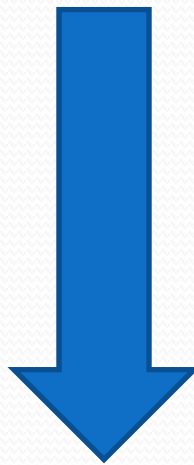
楳円(1)





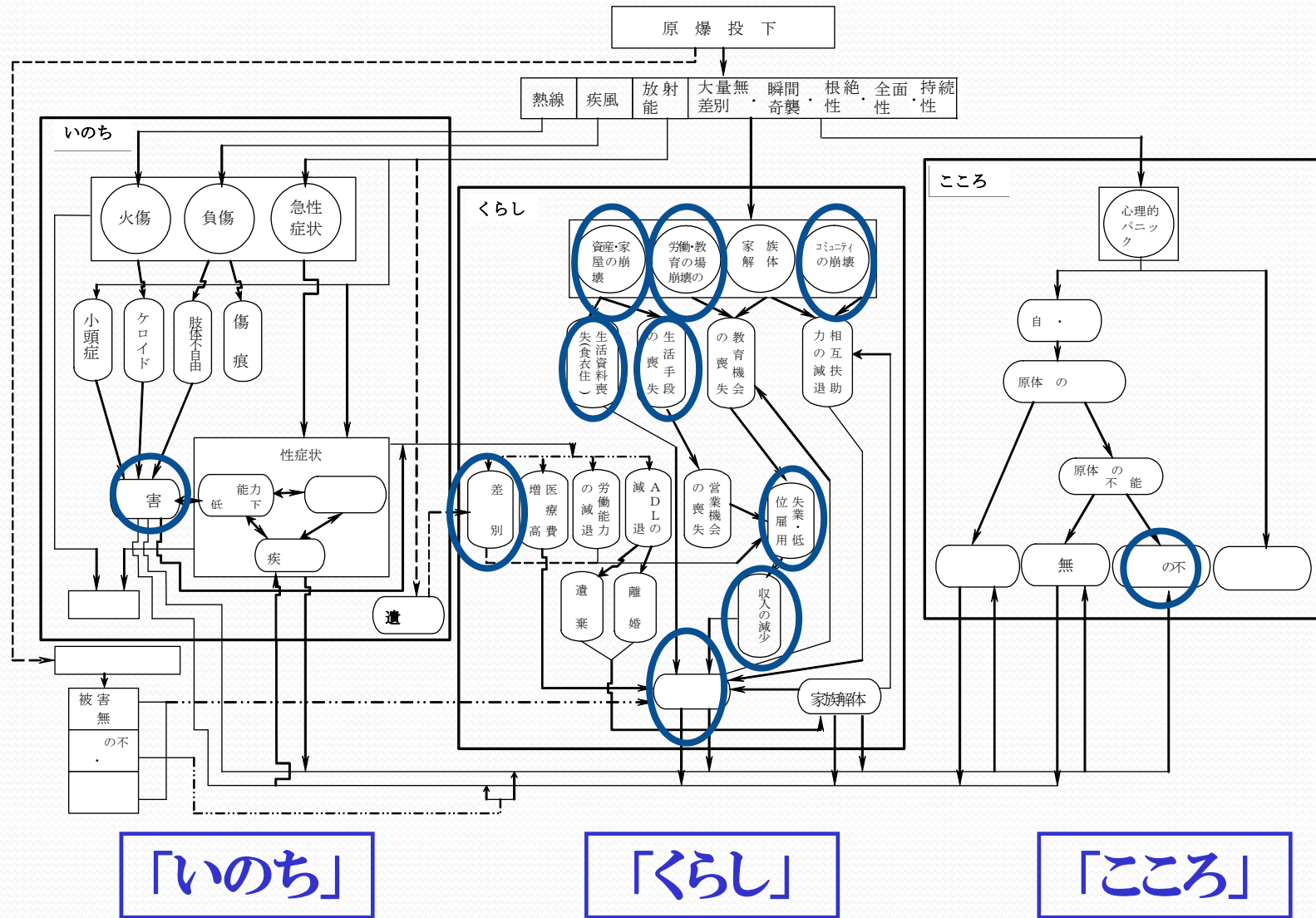
# 調査方法

- 旧プリピャチ市民を対象にオーラルヒストリーを実施、社会経済面における原発事故「前」「後」の比較、事故後の心的被害の検討などから、チェルノブイリ原発事故被害の一端を明らかにする。同時に、原子力に対する認識を探る。(質問項目に関しては、資料参照)



広島・長崎原爆被害の全体像を参考に、「こころ」と「くらし」の被害に注目し、原発事故が何をもたらしたか、を考える

原爆被害の全体像



# 聞き取り調査の概要

- 対象者
  - 1986年4月チェルノブイリ原発事故当時、プリピャチ市に在住し、現在、キエフ市に居住するもの
  - 旧プリピャチ市避難民の互助団体「ゼムリャキ」によるコーディネートによって、各世代10名へのオーラルを実施
- 実施日
  - 2009年6月11日・12日
  - 2009年12月17日
  - 2010年5月25日・26日 場所は何れもゼムリャキ・オフィス
- 質問要綱作成および質問は主に川野が行った。質問は日本語で行い、竹内が通訳した。今中、福場、小宮山が参加。

# 対象者基本情報

(以下、聞き取り順)

生年月日(調査時年齢) <事故当時年齢>	性別	人種	宗教	最終学歴	事故後の居住略歴等
1978年(30歳) <7歳>	女性	ウクライナ人	キリスト 正教	大学経済 学部	1978年プリピャチ生、1978～86年4月：プリピャチ、事故後2週間：ヤブルニウカ村、87年10月までポルタヴァ州(ウクライナ中部)、それ以降キエフ在住
1945年(64歳) <41歳>	女性	ウクライナ人	キリスト 正教	キエフ教 育大学	キエフ州イヴァンキウ地区生、1972年～86年：プリピャチ、事故後87年4月までチェルノブイリ市、87年4月以降キエフ在住
1950年(59歳) <36歳>	男性	ウクライナ人	キリスト 正教	キエフ工 科大学	ヴィーンヌイツャ州生、1974年5月～86年：プリピャチ、その後92年頃まで事故処理作業、97年以降キエフ在住
1963年(45歳) <23歳>	男性	ウクライナ人	キリスト 正教	専門学校 (建設)	ドンバス生、1984年～86年：プリピャチ、86年4月～89年1月：事故処理作業、その後、キエフ在住
1943年(66歳) <43歳>	男性	ウクライナ人	キリスト 正教	ハリコフ 工科大学	ポルタバ州、1974年～86年：プリピャチ、86年～89年：事故処理、事故後キエフ在住

# 対象者基本情報(2) (以下、聞き取り順)

生年月日(調査時年齢) <事故当時年齢>	性別	人種	宗教	最終学歴	事故後の居住略歴等
1970年(39歳) <15歳>	女性	ウクライナ人	キリスト正教	キエフ工科大学	ベラルーシ・ベロオジョールスク生まれ、1975年～86年4月:プリピャチ、事故後86年8月まで祖母のいるチェルニホフ州に避難、同年9月以降キエフ在住
1976年(34歳) <9歳>	男性	ウクライナ人	キリスト正教	キエフ国立大学	ヘルソン州生、1981年～86年、事故後キエフ→ミンスク郊外→オデッサ州(サマーキャンプ)、86年9月末以降キエフ在住
1960年(50歳) <26歳>	女性	ロシア人	キリスト正教	専門学校(建設)	ロシア生、1980年～86年:プリピャチ、事故後キエフ→モスクワ→ウクライナ・エネルゴダール(ザポロージェ原発)、86年11月以降キエフ在住
1955年(54歳) <31歳>	女性	ウクライナ人	キリスト正教	専門学校(医療)準医師	リボフ州生、1980年～86年:プリピャチ、事故後キエフ州イワンコフ地区→リボフ、86年11月以降キエフ在住
1938年(72歳) <48歳>	女性	ロシア人	キリスト正教	クラスノヤルヤルスク教育大学	ロシア・アスキス生、1970年～86年:プリピャチ、事故後ポレスコエ→ポロネージュ(ロシア)→パブロフスク、86年12月以降キエフ在住

# 原発事故前・後<1> (社会経済面における比較)

## プリピャチ当時

- 30歳女性の場合
  - 家族4人で3DK
  - 健康的な食品の配給
  - ソ連当時の生活の方が楽
- 64歳女性の場合
  - 家族3人で3DK
  - 食品価格安定、食料豊富(当時夫婦で540ルーブルほどの月収、当時比較的裕福であった原発職員の月給が250~350ルーブル)
  - プリピャチでの生活に満足

## キエフでの現在

- 30歳女性の場合
  - 3世帯同居で3DK
  - 添加物が入った食品
  - 生活苦
- 64歳女性の場合
  - 息子と二人でワンルーム
  - 現在は年金生活(月1500グリブナ)→悪くない(余談:複雑な年金計算システム)
  - プリピャチに死ぬまで住み続けたいと思った

# 原発事故前・後<2> (社会経済面における比較)

## プリピャチ当時

- 59歳男性の場合
  - 独身、1DKながらブルガリア製の家具、車を所有
  - 当時の月収約300ルーブル
- 45歳男性の場合
  - チェルノブイリ市内の古い一戸建てで妻と二人暮らし\*1986年10月に男児を出産
  - 月収約370ルーブル(夫婦)
  - チェルノブイリ市からプリピャチ市に移り、原発関連の仕事に従事したいと考えていた。500~600ルーブルも夢ではない

## キエフでの現在

- 59歳男性の場合
  - 3DK
  - 食事内容変化なし
  - 年金2000グリブナ、妻の500グリブナが物にある。生活苦
  - \*\*現実的で過去を懐かしむといった人ではない\*\*
- 45歳男性の場合
  - 2DKに妻子と3人で生活
  - 月収2000グリブナ(夫婦)\*インシュリン投薬のため月800グリブナ必要

# ユートピア？プリピャチ

- 夢・希望の町
- 仕事があり、豊かな活気のある町
- 多くの若者が移住
  - その当時としては、プリピャチというのは大変活気のある町で、休日であれば何らかの催しが必ずあるような町でした。一家でスポーツをやっていたりする人も多くて、大変活気がありました。(50歳女性)
  - ポリーシャ地方の自然は本当に素晴らしくて、きれいな川が流れて、自然のままの草原が広がって、野の草花も咲いている。プリピャチ川というのは、ドニエプル川などから比べると少し流れが速いのですが、その周りに小川が注いでいて、エデンの園のような美しいところです。(64歳女性)



# 旧プリピャチ市民の社会経済的被害

- 資産・家屋の喪失
- 労働・教育の場の崩壊・喪失
- コミュニティーの崩壊・喪失
- 経済レベルの低下
- 生活手段の喪失
- 失業

社会基  
盤の崩壊  
と喪失

# 社会基盤の崩壊を示す用例(1)

川野：(省略)原発事故で自分の人生が狂わされたという思いがありますか。

A：はい。もし事故がなければ、いまよりも、もっといい生活、人生があったかもしれないし、いまとは違うふうになっていたのではないかという気持ちはあります。

川野：一番変わったとすれば、何が変わったと思いますか。

A：まず、それまで住んでいた住居とか、あるいは学校、仕事から引き離されて、また一から生活を始めなければいけなかったということが、一番心理的に大きな影響を与えていると思いますし、それはわれわれ子どもたちだけではなくて、母親についても同じことがいえるのです。(30歳女性)

# 社会基盤の崩壊を示す用例(2)

- そうです。もう完全に生活、人生が変わってしまいました。それまでは安定した生活があり、明日という日について不安もなく、子どもも大きくなって、無事に学校を終えて将来がある。問題というほどのものはなく、安心して安定した生活を営んでいたのが、突然失われてしまって、何もない状態になってしまった。次の瞬間、何が起こるかわからないという状況でした。そのときの私たちの状態は、まったくそのようなことが起こるとは予想していなくて、何の不安も抱いていなかったところに、例えば、いきなり誰かが足元の穴に落ちてしまって、何でこんなことになったのだと思うような感じでした。
- 私たちにとって一番問題だったのは、先がどうなるかわからないということです。4月27日には3日間の避難と放送があったのですが、私はそれより前に避難していたわけで、先ほど言ったように月曜日には職場に戻るつもりでした。(中略)事故後1週間ぐらいたってから、やっとゴルバチョフのテレビ放送があって、もう住民は戻れないと言われました。そのときに私はヒステリー状態になって、誰か近い人が突然亡くなってしまったかのような状態でした。(64歳女性)

# プリピャチ住民にとっての原発事故とは

- 社会基盤の崩壊・喪失、ユートピアの崩壊



(旧プリピャチ市街)



(旧プリピャチ市街を一望できる16階建てアパートの内部)

# プリピャチ住民にとっての原発事故とは

- 社会基盤の崩壊・喪失、ユートピアの崩壊



(旧プリピャチ市の小学校跡)



(旧プリピャチ市の小学校跡)

# 現在の健康状態と子の健康不安

- 甲状腺疾患あり、健康不安あり。原発の影響だと思う。  
(30歳女性)
- 事故後に頭痛が始まった。多くの疾患を発症(脳の循環障害、心臓疾患等)。原発の影響だと思う。子供の健康不安大。(64歳女性)
- 強いて言えば健康不安なし。子供の健康に対しても同様。  
(59歳男性)
- 糖尿病、甲状腺疾患、高血圧。将来の健康不安、子供の健康不安あり。疾患は原発の影響だと考えている。  
(45歳男性)

# 社会基盤の崩壊・喪失及び健康不良は原発事故による影響だと認識している

- 現在の疾患、健康不良の要因は原発事故によるものだと認識している。
- 生活環境・基盤の突然の崩壊は、原発事故によるものだと認識している。「あの事故」により全てを失ったという強い思い。
- 原発事故で自己の人生が狂わされたという認識。
- 一方こんな意見も・・・原発事故で自分の人生が決定的に変わってしまったという思いはない(59歳男性)
- ...運命の巡り合わせということもあるでしょう(50歳女性) 諦観???

避難時の体験、または避難後の辛い体験など、夢で見たり、日常生活の中で思い出すことがあるか。

- 事故後のバスでの避難の様子

- そのとき自分は8歳ぐらいたったのですが、それは子どもだからというわけではなくて、大人にとっても、これまで住んでいた町を捨ててどこかに行くということで、全員にとって大変なストレスだったと思います・・・(30歳女性)

➤ 原発事故→避難地A→避難地B→避難地C・・・→キエフ  
(避難地を転々とする→不安↑)

- 事故処理作業時の情景

- 自分の印象としては、あそこの現場(事故処理後の)で働いていた2年ぐらいの間、ずっとそこで戦争をしていたかのような感じなんです。ただ、その敵が何だったのかというのは、誰にもよくわからない。(45歳男性)



# 夢で思い出す用例

川野：事故後の処理でいろいろな作業をされていたと思うのですが、それに関する情景を夢で見たりすることはありますか。

A：よくあります。そこでやっていた仕事については、よく夢に見ます。

A：それは怖い夢ですか。

A：恐怖です。ちなみに、その1988年には、4号炉の周りをコンクリートの塀で囲むという作業をしました。自分ともう1人、ペアで働くクレーン運転手と一緒に。それで、そのコンクリートの塀をめぐらすという作業は、4号炉そのものから100メートルないし150メートルぐらいのところ、ずっとやっていた。(中略)これは、もう消えることのない記憶だと思います。

A：目覚めたら、どういう感じがしますか。

A：抑鬱感でしょう。

川野：今にして思えば、事故処理なんかしなければよかったと思いますか。

A：ほかの仕事があれば、それはやっていたと思いますが、だからといって後悔する必要はないと思います。あったことは、あったこととして。

## チェルノブイリ原発事故被災者故の偏見・差別の用例(アパート配給時の軋轢)

- 当時、アパートの配給を25年ぐらい、ずっと待っていた人がいるわけです。その順番待ちをされていて、やっと手に入りそうになったと思ったら、突然、誰か知らないプリピャチから来た人に先取りされてしまった。(中略)また彼らも最終的には別のをもらえたわけですが、それにしても腹立たしいというか、やっともらえると思っていたものが後回しになったことへの不満や、やっかみがあったと思います。  
(64歳女性)
- ……配給時に「自分たちが待っていたアパートも家具も、全部あなたたちが持って行ってしまっ、もう何も無くなる」とか、大変不愉快なことを言われたことがあります……学校でも子どもたちがそういうことを言われたことがあります。(72歳女性)

## チェルノブイリ原発事故被災者故の偏見・差別の用例(アパート配給時の軋轢)続き

- ・・・例えばキエフの人が支給されるはずだったアパートを横取りしたというので、私たちにはなかったですが、聞いたところでは窓を割られたりした人もあるとか・・・(54歳女性)
- キエフでのアパート配給時に、地域住民との優先順位を巡っての軋轢があったようである。これに関する経験を語るものは多かった。

# チェルノブイリ原発事故被災者故の偏見・差別の用例

川野: どういった場面で、その偏見とか差別というのを感じたことがありますか。

A: 一般のキエフの人が、「あなたたちはプリピャチから来て、いろいろ恩恵があって、特典があっがいいですよね」という言い方をされるのですが、では、いまどんな特典があるのかといえば、市バスが無料だとかというぐらいです。保養権とかも以前は出たのですが、いまはないに等しいですし、医薬品でも、被災者に無料で出るというものが、いまはどんどん減っている状態ですので。(中略)ですから、そうやってうらやましそうに言う人たちが、では自分たちが汚染地域に行って仕事をするかといえば、誰もしないと思うんです。それにもかかわらず、そうやって「あなたたちはいいよね」というような言い方をされます。(45歳男性) (54歳女性もほぼ同様の発現)

➤ 無理解によるやっかみ → 日本の被爆者の場合と類似

## 原子力発電についての認識(肯定的意見)

- 大方が肯定的意見。事故原因は人為的ミス。しかし、核兵器には否定的？
- 私は原発そのものに反対というわけではないんです。やはり、それは人類の進歩だと思いますし、進歩を押しとどめることはできないものです。こんにちでは火力発電所もいろいろ問題が出てきて、それだけではやっていけないわけですから、原発も必要なのではないのでしょうか。しかし、きちんと安全の保安システムというものが、原発の稼働に伴っていなければいけない、安全が保証されていなければいけないと思います。(中略)科学は進歩していかなければいけないものですから、原子力そのものについて私は反対ではありません。(64歳女性)

## 原子力発電についての認識(否定的意見)

- 少数派？
- …私ももっと若い時は、原発に対してははっきりと否定的な立場でした。…いま現在の私の態度はどうかというと、もちろん原子力発電に賛成になったわけではありません。しかし、ウクライナの現状を見て、代替エネルギーが確立していないという点から、前ほど否定的ではないといえます。もちろん原子力は危険な技術だと思いますので、代替のエネルギー源があれば原発はやめるべきだ、無ければ無いほうが良いと思っています。(34歳男性)
- 否定的です。…原発は無ければ無いほうが良いと思います。(72歳女性)

事故に拘わる体験を誰かに話して聞かせたことはあるか。それを誰かに伝えなければならないと思うか。

● わかってもらえないから話さない

A: (省略)自分の友だちの女の子に、自分はプリピャチの出身で、そういう避難とかがあってという話をしたときに、最初は信用してもらえませんでした。「嘘でしょう」という感じです。(以下省略)

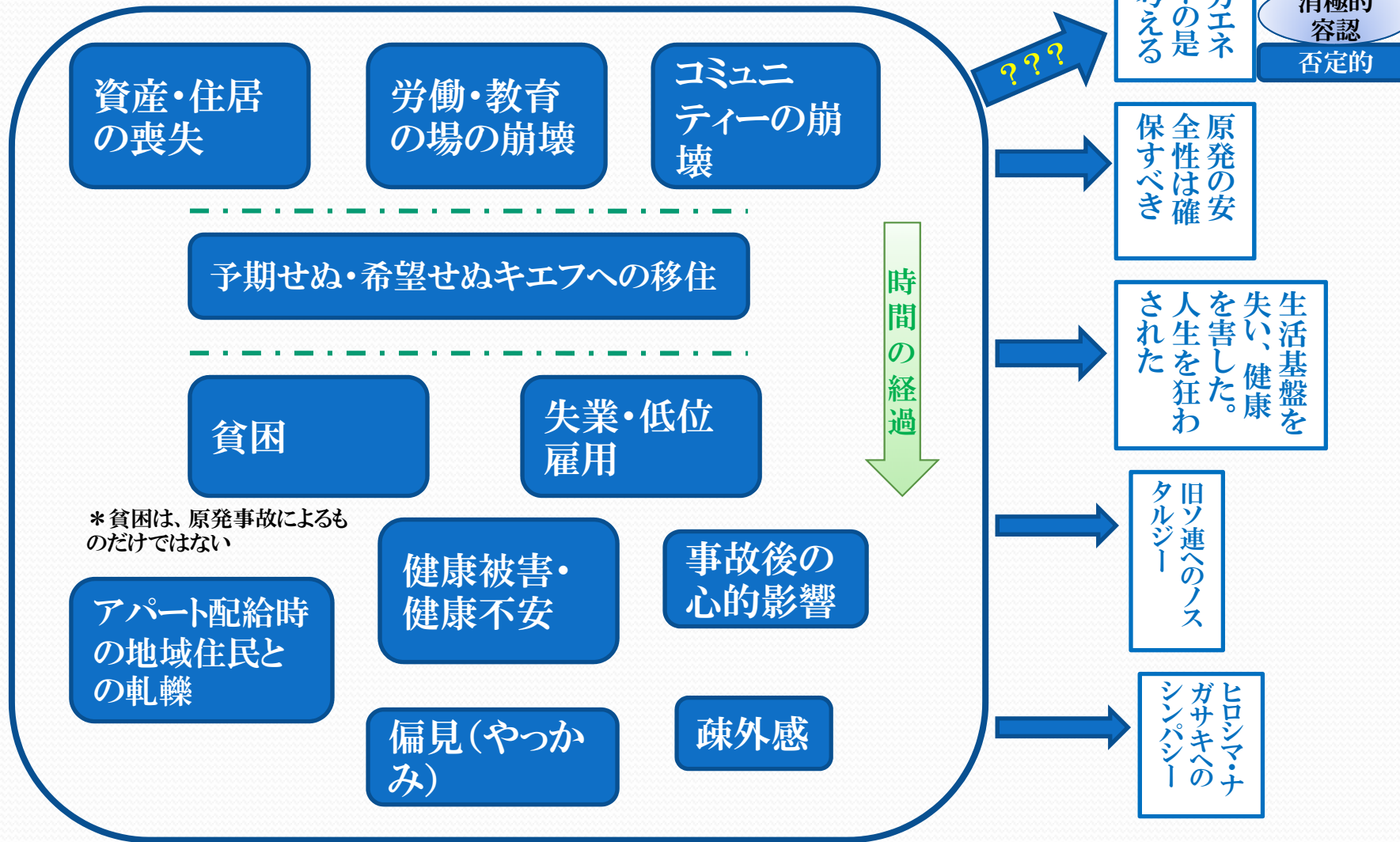
川野:だから、あまり話をしてもわかってもらえないだろうという気持ちがありますか。

A:やはり自分で体験していなかったり、自分の目で見えていない人にはわかりにくいことが大きいと思います。それは事故のとき、どんなにストレスがあったかというようなことも・・・(30歳女性)

● 旧プリピャチ市民同士でもあまり話さない:つらい悲しい思い出だから・・・(64歳女性)

● 話す必要性はない:どうせ無関心だろうから(45歳男性)

# 旧プリピャチ市民の原発事故による被害の一端





# 被災者としての補償など

- 食事の援助(100グリブナ程度?)
- かつては無料の医薬品があった
- 家賃・公共料金半額
- 月4000グリブナ程度あれば生活できる
- 被災者の子供:幼稚園・小4まで給食費無料、年一回の保養権(実際はほとんど履行されていない)
- 障害認定があれば 326グリブナの食費手当、なければ 160グリブナ

# 今後の課題

- 聞き取り調査の継続
- 各世代の特徴、世代間の異同
- 広島・長崎被爆者との異同、特に「暮らし」に関して
- その場合、復興したとされる広島・長崎と復興すべき街を喪失したプリピャチ市民との違いに注目
- キエフ移住時のアパート配給を巡ってどのような軋轢が生じたのか。当時の状況を検証する
- 補償制度について、その歴史と現状
- 原子力エネルギーに肯定的な社会背景、などなど